

大学教養英語での多聴について  
—— 授業外学習のためのツール ——

三原智子, 山田敏幸

**Extensive Listening for Liberal Arts English in University:**  
—— A Self-study Tool ——

Tomoko MIHARA, Toshiyuki YAMADA



# 大学教養英語での多聴について

—— 授業外学習のためのツール ——

三原 智子, 山田 敏幸

群馬大学教育学部英語教育講座

(2017 年 9 月 27 日受理)

## Extensive Listening for Liberal Arts English in University —— A Self-study Tool ——

Tomoko MIHARA, Toshiyuki YAMADA

Department of English, Faculty of Education, Gunma University

(Accepted September 27th, 2017)

The goal of this paper is to explore a possibility for introducing Extensive Listening to the unified curriculum for liberal arts English at Gunma University. In Chapter 1, we review what we have dealt with development of liberal arts English at Gunma University with a particular focus on Extensive Reading, and discuss the importance of out-of-class study for English learning. In Chapter 2, we define Extensive Listening and investigate its benefits based on earlier studies, and a possibility is discussed for introducing Extensive Listening to our unified curriculum. In Chapter 3, we report the results of a questionnaire that asked English-majoring students of the School of Education for their opinions about Extensive Listening and Reading. The results suggest that those students whose proficiency is estimated as relatively high due to belonging to the English major feel that Extensive Listening as well as Reading is useful and effective for their learning of English. Finally, in Chapter 4 we discuss teaching materials towards introducing Extensive Listening to our unified curriculum, and in Chapter 5 we conclude the paper. (Chapters 1, 2, and 4 were written by the first author, Chapter 3 by the second author, and Chapter 5 by both.)

### 1. 序論

#### 1.1. 多読について

平成 23 年度以降、群馬大学理工学部教養英語の授業では、大学教育センター(旧、教育基盤センター)所属の英語教員のリーダーシップのもと数々の改革が行われ、習熟度別クラス制、クラス規模の縮小、共通教科書、プレイスメント・テスト、アチーブメント・テスト、共通カリキュラムなどが導入されてきた。理工学部共通カリキュラムでは、1 年次に週 2 回の教養英語の授業が組み入れられ、リスニング授業(英語 A)とリーディング授業(英語 B)に分かれて、後者では多読(Extensive Reading)が全クラスで課された。これらの取り組みの成果は、統一英語試験(TOEIC-IP)の結果の伸びとして表れた(飯田, 2016: 63, 94)。

この成果をもとに、平成 29 年度から、教養英語共通カリキュラムが教育学部にも導入された。平成 32 年

度改訂の次期学習指導要領による小学校での英語教科化を控え、教育学部の学生は何専攻であれ、英語の指導能力や ALT（外国語指導助手）とのコミュニケーション能力の修得が求められている。しかし、現時点では、英語専攻以外の教育学部生の英語能力は決して高くない。この状況を打破すべく、教養英語共通カリキュラムでは、教科書や成績判定を全クラスで統一し、1年次にリーディング授業（英語 R）、2年次にリスニング授業（英語 L）を週1回ずつ行い、前者において多読を導入した。

多読（Extensive Reading）は精読（Intensive Reading）と真逆の学習法である。精読が辞書を用いて、難解な英文を、日本語を介して理解することであるならば、多読は辞書を用いずに、未知語5%以内の平易な英文を、英語を英語のまま多量に読むことを主眼とする。ある本を読み進めて、難解すぎる場合や興味がわからない場合は途中でやめて、自分のレベルにあったものを選ぶことが重要である。多読の最大の魅力は、読書を楽しみながら英語力を伸ばせる点にある<sup>1</sup>。

多読の効果は、単語認識力・読解力・速読力・4技能（読む、書く、聞く、話す）の向上、ならびに語彙数の増加など、数多く報告されている（Renandya & Farrell, 2010: 56）。とはいえ、効果を感じるには、文字通り多くの読書が必要不可欠だ。酒井（2002: 23）は100万語を一つの大きな目標として挙げている。豊田工業高等専門学校の実践報告によれば、「学生の多くが読解力の向上を実感すると判断」できるのが年間30万語の読書語数であり、TOEICで多読の効果を検出できるのも年間30万語の読書語数である（西澤、他、2008: 2-3）。しかし、1990年代、および2000年代に採択数上位にあった中学校教科書3年分（*New Horizon 1, 2, 3*）の延べ語数が、それぞれ9,440語、7,128語であり、高等学校で採択数上位にあった教科書（*Unicorn 1, 2, Unicorn Reading*）の延べ語数が、それぞれ46,118語、41,112語であった<sup>2</sup>。つまり、大学1年生はこれまでの中高6年間の授業内で延べおよそ5~6万語の英文に触れた経験しかなく、100万語の目標設定は、彼/彼女らにとってまさに未知の領域であろう（長谷川・中條、2004: 147）。

群馬大学理工学部の教養英語共通カリキュラムは、平成23年度以来、多読目標語数を少しずつ増やしている。報告書（飯田、2016: 16）によれば、平成25年度の目標語数は、前期7万500語（4,700語×15週）、後期12万語（8,000語×15週）であった。平成28年度には、前期10万語（約6,700語×15週）、後期16万語（約10,700語×15週）に増加した<sup>3</sup>。さらに、豊田工業高等専門学校の実践報告（西澤、他、2008）を受けて、平成29年より理工学部、教育学部ともに、共通カリキュラムでは、半期で15万語（10,000語×15週）の多読を課し、年間で30万語達成をめざす<sup>4</sup>。

群馬大学図書館は様々な出版社の多読用図書（Graded Readers）を5段階にラベル分けして備えており、2016年12月現在、その数は中央図書館（荒牧キャンパス）で14,570冊、理工学図書館（桐生キャンパス）で4,817冊、医学図書館（昭和キャンパス）で3,990冊である<sup>5</sup>。学生は自分の好みに合わせ、自分のペースで本を借り、1冊読み終わるごとにMoodleと呼ばれるeラーニングプラットフォーム上で本の内容に関する質問に答える（The Moodle Graded Reader Quiz module）。各自の読了語数はMoodle上で加算され、教員は同じくMoodle上でそれを確認できる。Moodleの活用により、学生が読了語数を教員に報告する労力、ならびに、教員がそれを管理する労力は、それぞれ、最低限に抑えられている。このことは、「多読」が群馬大学理工学部共通カリキュラムに定着した理由のひとつだと考えられる。

教員の中には授業時間の一部を多読に当てる者もいるが、授業内の実践のみで目標読了語数に達するのは不可能であり、多読学習は原則的に授業外に行われる。とはいえ、多読プログラムの受講者数は、平成29年度の教養英語共通カリキュラムに関してだけでも、全28クラス、約730名に上る（理工学部1年生20クラス約510名と教育学部1年生8クラス約220名<sup>6</sup>）。その中には、英語に苦手意識をもつ学生も少なくなく、授業外での多読を彼らの自主性のみ任せすることはできない。そこで、学生の多読への参加率を高めるために、教養英語共通カリキュラムでは読了語数を成績に算入している（20%程度）。学生は成績算入という動

機づけから出発し、半ば強制的に多読を实践するが、読書を続けるうちに楽しみを発見し、カリキュラム終了後も自主的に多読の实践を続け、最終的には自律的学習者へと育つことが期待されている。

## 1.2. 授業外学習

このように、群馬大学教養英語共通カリキュラムでは、授業外学習（多読）が全クラスに組織的に課されている。学生用ハンドブックでは、半期 15 万語の目標読語数に達するため、1 週間に 1 万語前後を読むよう勧めている（3,000 語強の図書を 3 冊程度）<sup>7</sup>。半期 15 週で 15 万語に達する見込みである。理工学部の学生については、ALCNetAcademy 2 スーパースタンドコースを使用してリーディングスピード（Words Per Minute）を計測しており、平成 25 年度は、4 月期に毎分 147 語、7 月期 172 語、1 月期 167 語であった（飯田、2016：58-59）。ここから、学生たちが毎分約 150 語のペースで読書を行うと仮定すると、半期（15 週）で 15 万語の目標語数に達するには 1,000 分（約 17 時間）の読書が必要になり、1 週間に 67 分、1 日におよそ 10 分を多読に当てることになる。年間では 34 時間を多読学習に当てれば、目標語数 30 万語に達する計算である<sup>8</sup>。

しかしながら、英語習得に必要なとされる時間はさらに膨大である。Lyddon（2011）によれば、日本の平均的な大学 1 年生が、英語圏での学士留学や就業に必要なとされる英語能力（ヨーロッパ言語共通参照枠 CEFR の B2「自立した言語使用者」レベル）を修得するためには、自習も含めおよそ 1000 時間の学習を必要とする<sup>9</sup>。他方、ケンブリッジ大学英語検定機構によれば、年齢や学習背景、授業外で英語に触れる機会などの条件に左右されるとはいえ、A2「基礎段階の言語使用者」から B2「自立した言語使用者」のレベルに至るには、およそ 400 時間相当の、教員による授業を受講する必要がある<sup>10</sup>。しかし、群馬大学の必修教養英語の授業時間は計 90 時間でしかない（1.5 時間×15 回×4）。たとえ、高年次の専門教育において、他の英語授業を受講したとしても、授業時間のみで英語習得に必要な学習時間を確保することは、多くの群馬大学の学生にとって困難である（Lyddon, 2012）。

学生の学習時間については、平成 24 年の中央教育審議会の答申に、「我が国の大学生の学修時間が諸外国の学生と比べて著しく短い<sup>11</sup>」とある。これによれば、学期中の一日当たりの総学修時間は、卒業必要単位数から計算すると、授業を含め 8 時間程度のはずである。しかし、実際には、日本の大学生の学修時間はその約半分の一日 4.6 時間にとどまり、アメリカの大学生と比較してきわめて短い<sup>12</sup>。その一因は日本の学生の授業外学習の少なさである。平成 28 年文部科学省国立教育政策研究所監修の「大学生の学習実態に関する調査研究について」によると、大学 1~3 年生が授業の予習・復習などに費やす平均時間は週 5 時間にすぎず、必要な予習や復習をしていると自任している学生についても、週 11 時間以上の予習や復習などを行っている者はそのうちの 3 割程度にとどまる<sup>13</sup>。「単位の実質化」（1 単位の授業科目は 45 時間の学修を必要とする内容をもって構成される）が依然として進んでいないのだ。しかし、中央教育審議会の答申によれば、学修の質を確保するため、また、学士課程教育について大学間の制度的な共通性を維持するため、さらに、国際的に日本の大学が信頼を得るためには、質を伴った学修時間（事前の準備、授業の受講、事後の展開）の確保が不可欠である<sup>14</sup>。

このように、授業外の自習時間の確保は、英語習得に必要な学習時間を確保するために、ならびに、「単位の実質化」を図るためにも重要である。今後、教養英語共通カリキュラムでは、多読に加えて、他の自習プログラムを学生に課することが求められる。例えば、英語のインプット（リーディング・リスニング）を授業外学習に組み込み、高年次英語教育におけるアウトプット（ライティング・スピーキング）に備えることが考えられる。具体的には、現在、共通カリキュラムのリーディング授業で実施されている「多読」のほかに、リスニング授業での「多聴」や録音音声ソフトを用いた発音訓練を、授業外学習に導入することである。

理想は、読む・聞く・発音について、すべて授業外学習を課すことであろう。

## 2. 多聴について

リスニング授業における多聴の必要性は、『群馬大学理工学部教養英語教育実践報告平成23年～25年度』において、繰り返し指摘されている。平成23年度、24年度、25年度の各報告においても、TOEICのリスニングの伸びがリーディングに比べて小さいことが記され、リスニング力の改善のため、多聴の導入が提案されている。平成25年度報告は以下のように指摘する：

リスニングのクラスが週に1回設けられているにもかかわらず、リーディングほどの学習成果が反映されなかった原因として、授業外ではリスニングを学習する機会が少ないこと、授業内だけのリスニング活動では（スキルの向上には）十分ではないことが考えられる。[...] リーディングのクラスで実施している多読活動同様に、今後リスニングのクラスでも多聴活動を導入するとより良い学習成果が見られるかもしれない。リスニング能力を改善するためには、授業内での学習方略の指導、及び練習だけでは不十分で、個々の学生が授業外で「聴く」練習をすることが大切である<sup>15</sup>。

多聴 (Extensive Listening) の主眼は、学生が楽しみながら、リスニングのインプットを多量に行うことにある (Renandya & Farrell, 2010:56)。精聴 (Intensive Listening) が、主にクラス内で教員の指導のもと、比較的短い音声テキストから詳細な情報を聴き分けることだとすれば、多聴においては、学生が個別に教材を聴き、情報の要点を理解することが重要とされる。語彙や文法の細部を聴き取るというよりは、英文の流れや意図、全体の内容を理解することを目指す (Povey, 2016:35-36)。多聴の効果については、リスニング理解の向上だけでなく、リスニング時の集中力・自信・モチベーションの向上が報告されている。特に、初級や中級レベルの学習者にとって、多聴は効果的だという (Povey, 2016:37)。また、多聴により、難しいリスニング教材に対する緊張を解くことが可能となる、との報告もある (Ducker & Saunders, 2013:383)。

具体的な実践上の秘訣について、Povey (2016:36) は多読の定義を応用しつつ、次の点を挙げている：

- ・できるだけ多量の教材を聴く
- ・多様なテーマ・ジャンルの教材を聴く
- ・理解できるレベルの教材を聴く
- ・聴きたい教材を自ら選択する
- ・聴くことそのものがご褒美である
- ・聴く目的は、楽しみのため、情報を得るため、全般的な理解を得るため、である
- ・リスニングは個人で行う
- ・教員は学生の進捗度を追い、指導を行う

また、Haginoya (2013:13-14) や Holden (2008:304) は、酒井 (2002) の提唱した SSS 方式 (Start with Simple Stories) ならびに、Day & Bamford (1998) が提唱した多読の「10の秘訣」を多聴に応用することを提案している。また、Vandergrift & Goh (2012:200-201) は多彩さ・頻度・反復を多聴の3原則とし、学習者が多様なテーマやタイプの教材を聴くこと、規則正しい頻度・時間を守って聴くこと、同じテキスト

を複数回聴くことを奨励している。これらのガイドラインから演繹されるのは、多聴実践のために必要なのは、できるだけ多数かつ多彩な録音教材を揃えること、同時に、教材のスピード・語彙・文法などが各学生の理解力の範囲内にあること、また、多聴を習慣化して一定の多聴時間を確保することである。

しかし、多聴の実践にはまだまだ不明な点が多い。まず、適切な時間・量について、明らかなことはわかっていない。日本の大学生がどれだけの時間・量の多聴を行えば効果が見えるのか、現在までのところ、数値を報告した研究はみられない。ただ、長時間のリスニングは母語の習得と同様、外国語（英語）の習得にも効果的であろうと推測できるのみである。

また、どの程度のレベル（スピード、内容）の教材が群馬大学教養英語共通カリキュラムの受講生に適しているかについても、詳細は明らかでない。ある研究者は、多聴教材の選択の目安として、学習者が教材内容の90%以上を理解できること、語彙や文法の95%以上を理解できることを挙げている<sup>16</sup>。また、Renandya & Farrell (2010: 53)によれば、初心者レベルのEFL (English as a Foreign Language) 学習者は、比較的ゆっくりとしたスピーチでさえ、非常に速い、または速すぎると感じる。Haginoya (2013:13-14)によれば、同じ Graded Readers のテキストについて、読むよりも聴き取るほうが難しく、学生が90%の語彙を聴き取れるテキスト付属のCDは、リーディングの際に理解できる文字テキストより2段階低いレベルのものである。おそらく、群馬大学理工学部・教育学部の大多数の学生については、まず、かなり簡単な教材に挑戦させ、多聴の実践に慣れ親しませることが必要であろう。最上級クラスに属する学生にのみ、スピードが比較的速く、語彙も少し難解な教材を聴かせてもよいかもしれない。

次に、どのような種類の音声テキストを聴かせると、最もリスニング能力向上に効果的なのかについても、明確な答えはない。生の会話の録音がよいのか、文学テキストの朗読がよいのか、アナウンサーによる時事ニュースがよいのか、プレゼンテーションや演説がよいのか、すべてを混在させるべきなのか、不明である。Ducker (2013: 518-519) は多聴の実践のために、自然な会話の録音を選んでおり、彼の考えでは、実生活や将来社会で必要とされるのは会話を聴き取る力であり、CDの朗読やニュースを聴くことに学生のほとんどは興味を持っていない（ただし、彼の実践で対象となったのは、TOEFL スコア 400-439 点の中級レベルの学生からなる比較的少人数のグループである (23名×2クラス))。群馬大学教養英語共通カリキュラムの受講生に、スピード調整のない自然な会話を教材として与えることが適切かどうかは、熟考の余地が残る。今後、多聴の最適なレベル・種類・必要最低限の量（時間）については、学生の資質、嗜好ならびに必要性を鑑みて試行錯誤を続ける中で、明確にしていくしかないであろう。

Haginoya (2013: 12)によれば、多読に比べ多聴の実践報告が少ない理由のひとつは、ここ10年ほど前まで、多量かつ多彩なリスニング教材の取得が困難であったことにあり、教材や機材が高価な場合、多聴はどうしても、授業内での、かつ教室内での実践に限られてしまう。たとえば、2012年の沖縄工業高等専門学校に関する実践報告によると、「多聴の授業は全てCALL教室で行われている。多読教材とは別に、貸出禁止の約3,000冊の多聴教材が準備されている。授業の基本は多聴教材を聴き読みすることである。」(新川, 2012: 30)。授業時間内だけの、かつCALL教室内に限られた実践では、リスニングに費やす総時間数と参加学生の数が限定されてしまうことが懸念される。

しかし、現在、無料のWeb教材が数多く存在し、またCD、CD-ROM、CD付テキストも安価で手に入る。かつ、スマートフォンやタブレットによって、いつでもどこからでも教材にアクセスできる (Haginoya, 2013: 12)。リスニングのための「場所」と「時間」の自由を保障することが可能になり、授業外学習への多聴導入が容易になったのである。『群馬大学理工学部教養英語教育実践報告』はこの点を踏まえ、以下のように提案している。

今後、担当教員は、学生が個々にアクセスできるリスニング教材をオンライン（e.g., Moodle）上にアップロードし、授業内でその教材を紹介し、自立的なリスニング学習を促すような指導を心掛けていく必要がある。また、必要に応じて、授業での課題（宿題）の1つとして授業外学習を推奨していく必要があるかもしれない。例えば、アルク教育社の「スーパースタンドコース」を用いてのリスニング学習や Voice of America（VOA） Learning English programs や TED Talks のようなリスニング教材を使つての英語学習も可能であろう。ただし、語彙自学学習同様、担当教員は、単に学生にリスニング学習をさせるのではなく、彼らの学習進捗を把握しながら便宜助言や指導をすることで、学習支援サポート体制を確立していくことが重要である<sup>17</sup>。

実際、平成27年度には、スマートフォン等を活用した多聴の実践が、群馬大学教育センター所属の教員2名により報告されている（Hoogenboom & Keith, 2015）。対象となったのは、理工学部1年生の最上級2クラス（各25名）と教育学部英語専攻1年生の15名であり、皆、中級レベルの英語使用者である。彼らは学期中、毎週、自ら選択した Voice of America Learning English programs の音声ファイルまたは Graded Readers の付属CDを30分ほど聴いて、内容についてメモをとり、その要約やそれに対する意見を英語で述べて、スマートフォン等に録音し、録音ファイル（MP3）を教員宛てメールに添付した。同時に、学生は CAN-DO リスト（CEFR を参考に教員が作成したもの）をもとに、英語技能の向上を自己点検した。教員は、学生が録音した口頭レポートについて、メールでの返信や教室内での指摘によりフィードバックを行った。

Ducker & Saunders（2014）も同様の試みを紹介している。彼らの実践では、Google Drive や Facebook を用いて、学生がリスニング内容の要点を書いて報告し、教員がそれに対してフィードバックを行ったり、グループでディスカッションを行ったりした。群馬大学の上記の実践同様、この実践においても、多聴とアウトプット活動を結び付けている。これは、我々のカリキュラム作りが大いに参考とすべき点であろう。ただし、両実践において対象となった学生たちは共に中級レベルの英語力を有していた。そのため、リスニングをスピーキングやライティングに結び付けるという活動が比較的容易であった。また、対象クラスについても、比較的少人数からなっていたため（20人×4クラス）、教員からの個々の学生へのフィードバックやグループでの討論が可能であった。

しかし、群馬大学教養英語共通カリキュラムの受講生の中には、CEFR でいう A2 「基礎段階の言語使用者」レベルも存在し、彼らにとって、リスニングの内容をスピーキングやライティングといったアウトプット活動によって教員に報告することは、かなりの困難と時間を要する。また、クラス規模も大きく、特に、教育学部のリスニング授業については、1クラス30名を超えるため（7クラス、計220人）、上記の2例のように、各学生に個別にフィードバックを行うことは教員にとって多大な労力を伴う。多聴に伴う負担が多いと、学生は多聴を楽しめずに放棄し、教員は多聴をクラスに導入することに躊躇し、結果的に、多聴の組織的な導入が頓挫しかねない。このように、群馬大学教養英語共通カリキュラムでは、教員による学生の多聴自習のコントロールを、教員と学生の双方にとって、できるだけ負担が少ないものにすることが求められている。

### 3. 多読と多聴に関する意識調査

これまで第1章において多読の、第2章において多聴の重要性を論じてきたが、果たして両者はどの程度学生に浸透していて、学生は両者の有効性・有用性をどの程度感じているのだろうか？本章では群馬大学教育学部英語専攻生を対象に実施した、多読と多聴に関する意識調査の結果を報告し、群馬大学教養英語共通カリキュラムへの多聴導入について考察する。

### 3.1. 調査協力者

群馬大学教育学部英語専攻生（1～4年生）60名が無償で本調査に協力してくれた。調査協力者を英語専攻生に限定したのは、英語習熟度が比較的高い学生にとって多読と多聴の有用性があるかどうかを調べるためである。なお、学年ごとの回答人数にばらつきがあったため、今回は結果を学年間で比較対照して分析することはしない<sup>18</sup>。

### 3.2. 調査項目と検証対象

表1の18項目について調査を実施した。

今回は表1の呈示順1, 3, 6, 8, 9, 10, 12, 15, 17, 18の項目に焦点を当て、結果を報告する。

また今回検証する対象は以下のとおりである。①「読む」と「聞く」の技能に対する自信（項目1と10）を比較し、「聞く」自信の方が低いかどうか調べる。もしも「聞く」自信の方が低いことが分ければ、英語

表1 多読と多聴に関する意識調査の項目

呈示順	項目内容	回答方法
1	英語の「読む」技能について自信はありますか？	7段階評価
2	英語の「読む」技能を向上させるためにどのような取り組みをしていますか？できる限り多く答えてください。	自由記述
3	英語の「読む」技能を向上させる最も良い方法は何だと思いますか？	自由記述
4	「精読」(Intensive Reading)という言葉聞いたことはありますか？	二択
5	「精読」とは何ですか？（「精読」という言葉聞いたことがないと答えた人は「x」（アルファベットのEックス）と記入して次へ進んでください）	自由記述
6	「多読」(Extensive Reading)という言葉聞いたことはありますか？	二択
7	「多読」とは何ですか？できる限り詳細に答えてください。（「多読」という言葉聞いたことがないと答えた人は「x」（アルファベットのEックス）と記入して次へ進んでください）	自由記述
8	「多読」は英語学習に役立つと思いますか？（「多読」という言葉聞いたことがないと答えた人は「x」を選んで次へ進んでください）	二択
9	8（「多読」は英語学習に役立つか？）で「はい」あるいは「いいえ」と答えた人はその理由を記入してください。（「多読」という言葉聞いたことがないと答えた人は「x」（アルファベットのEックス）と記入して次へ進んでください）	自由記述
10	英語の「聞く」技能について自信はありますか？	7段階評価
11	英語の「聞く」技能を向上させるためにどのような取り組みをしていますか？できる限り多く答えてください。	自由記述
12	英語の「聞く」技能を向上させる最も良い方法は何だと思いますか？	自由記述
13	「精聴」(Intensive Listening)という言葉聞いたことはありますか？	二択
14	「精聴」とは何ですか？（「精聴」という言葉聞いたことがないと答えた人は「x」（アルファベットのEックス）と記入して次へ進んでください）	自由記述
15	「多聴」(Extensive Listening)という言葉聞いたことはありますか？	二択
16	「多聴」とは何ですか？できる限り詳細に答えてください。（「多聴」という言葉聞いたことがないと答えた人は「x」（アルファベットのEックス）と記入して次へ進んでください）	自由記述
17	「多聴」は英語学習に役立つと思いますか？（「多聴」という言葉聞いたことがないと答えた人は「x」を選んで次へ進んでください）	二択
18	17（「多聴」は英語学習に役立つか？）で「はい」あるいは「いいえ」と答えた人はその理由を記入してください。（「多聴」という言葉聞いたことがないと答えた人は「x」（アルファベットのEックス）と記入して次へ進んでください）	自由記述

専攻生ですら「聞く」ことには困難を覚えていることが推測でき、「聞く」技能向上の必要性が見出せる。②多読と多聴の浸透度合い（項目6と15）を比較し、多聴の方が浸透していないかどうか調べる。また、「読む」と「聞く」の技能を向上させる最良の方法（項目3と12）を比較し、それぞれ多読と多聴がどれほど挙げられているか調べる。もし多聴の方が多読よりも浸透しておらず、だが多聴が「聞く」技能向上の最良な方法であることが分かれば、教養英語への多聴導入の重要性が見出せる。③多読と多聴の有用性をどの程度感じているか（項目8と17）を比較し、同程度であるかどうか調べる。もしそうであれば、多聴が多読同様に有用であることが分かり、教養英語への多聴導入の動機づけを見出せる。また、多読と多聴の利点と弱点（項目9と18）を比較することで、教養英語へ多聴を導入した際の問題点を事前に把握することができる。

### 3.3. 手続き

60名からの回答はGoogleフォームを活用し、インターネット上で収集した。調査項目への回答前には、「この調査の目的は、英語専攻生の英語学習に対する意見を収集し、群馬大学教育学部生が受講する教養英語の授業改善を図ることです。」と調査の目的を明示し、「本調査の回答は学業成績に一切反映されず、あなたの能力を測るものでもありませんので、以下の質問に率直に答えてください。」と教示し、できる限り取り繕わない回答を収集できるようにした。なお、一項目当たり、または調査全体に時間制限は設けず、調査協力者は十分な時間をもって回答をした。

### 3.4. データ分析

統計ソフトRを用いて統計分析をした。検証対象①「読む」と「聞く」の技能に対する自信（項目1と10）は、被験者内分析になるため、ランダム効果付きの順序ロジット関数（ordinal というパッケージ内の `clmm` 関数）を使って比較した。独立変数として「読む」と「聞く」という二水準をもつ条件を設定し（中心化によってエフェクト・コーディングをした）、従属変数は順序尺度である、調査項目1と10の回答（7段階評価値：1＝全く自信がない～7＝非常に自信がある（4＝どちらともいえない））であった。検証対象②多読と多聴の浸透度合い（項目3と12）は、こちらも被験者内分析となるため、一般化線形混合モデル（`lme4.0` というパッケージ内の `glmer` 関数）を使って比較した。独立変数は上記同様で、従属変数は二値尺度である、調査項目3と12の回答（「はい」または「いいえ」）であった。両分析とも、ランダム効果として調査協力者のみ（ランダム切片だけでランダムスロープなし）を入れた最も簡素なモデルを採用した。以下、結果については推定値（estimated coefficient,  $\beta$ ）、標準誤差（Standard Error,  $SE$ ）、 $z$  値（ $z$  value,  $z$ ）、 $p$  値（ $p$  value,  $p$ ）を報告し、 $p$  値が .05 よりも小さい場合に当該の差が統計的に有意であることとする。

### 3.5. 結果と考察

まず検証対象①について、「読む」技能に対する自信評価の平均値が4.6（標準偏差1.1）、「聞く」技能に対する自信評価の平均値が4.1（標準偏差1.4）であった。統計分析の結果、有意差が確認された（ $\beta = -0.5321$ ,  $SE = 0.1932$ ,  $z = -2.755$ ,  $p = .00587$ ）。これは英語習熟度が比較的高いと考えられる英語専攻の学生であっても、「読む」技能に対する自信に比べて、「聞く」技能に対する自信が低いことを示しており、「読む」ことに比べて、「聞く」ことに、より困難を覚えている可能性がある。もしそうであれば、「聞く」技能の向上に資する教育的支援が必要になる。

次に検証対象②について、「多読」の浸透度合いが1.0（つまり、全ての協力者が「多読という言葉聞いたことあるか？」に「はい」と回答）であったのに対し、「多聴」の浸透度合いが0.67（つまり、およそ7割の協力者が、多聴という言葉聞いたことがある）であった。浸透度合いについては、統計的有意差は観

察されなかった ( $\beta = -9.476, SE = 1149.330, z = -0.008, p = .993$ )。ただ、数値的に見れば、多聴という言葉を知ったことがない者が3割程度いることになる。だが、「聞く技能を向上させる最良の方法」(項目12)として、「多聴」という言葉を知ったことがないと回答した者のほとんどが、「英語をたくさん聞く」、「毎日英語を聞く」などとし、「多聴」を良い訓練であるとしていた。なお、「多聴」という言葉を知ったことがない者も含めて、「読む技能を向上させる最良の方法」(項目3)として「多読」に関わる回答をしたのが60名中40名、項目12では「多聴」に関わる回答が60名中32名と、半数以上の英語専攻生が多読に加えて、多聴の重要性を認めている。

最後に検証対象③について、多読という言葉を知ったことがある者で多読は英語学習に役立つと答えたのは60名中58名(項目8)、多聴という言葉を知ったことがある者で多聴は英語学習に役立つと答えたのは40名中40名(項目17)であった。これは多読あるいは多聴を経験した学習者のほとんどがそれぞれの有効性・有用性を認めていることを示す。項目9と18ではそれぞれ多読、多聴の利点が見えてきた。多読については、読むスピードが上がる、語彙力が上がる、英語の文を読むことに対する抵抗が下がる等の意見があった。多聴についても、語彙力が上がる、英語の文を聞くことへの抵抗が下がる等の意見があり、英語特有の発音やイントネーションに耳が慣れるとの意見もあった。他方、多読は英語学習に役立たないと答えた2名からは、多読のテキストの質が悪い、自分には細かくテキストを読む精読の方が合っているとの意見があり、また多聴は英語学習に役立つと答えた1名からも、多聴はある程度英語の基礎がないと効果が弱いと思うとの意見もあった。これは、多読・多聴の運用について、教材の質、各学習者の学習スタイル・習熟度などを考慮する必要があることを示唆している。

以上、多読と多聴に関する意識調査について、今回検証対象とした3事項についての結果を報告し考察した。英語専攻生は、他専攻生に比べて英語に触れる時間が長く、結果として英語習熟度が比較的高いと考えられる学習者である。彼/彼女らの意見は今後の群馬大学教養英語共通カリキュラムを考えていく上で大切な示唆を与えてくれる。具体的には、日本人英語学習者は総じて「読む」技能よりも「聞く」技能に困難を覚える傾向にあること(検証対象①)、多くの学習者は多読が「読む」技能に対してそうであるように多聴も「聞く」技能を向上させる最良の方法と認めていること(検証対象②)、実際に多読・多聴を経験した学習者のほとんどが多読・多聴の有用性を感じていること(検証対象③)が明らかになった。ただ、授業外学習として多読・多聴を導入し実施するにあたっては、各学習者の学習スタイル・習熟度に多様性があることに配慮し、また様々なレベル・ジャンルの教材を用意することはもちろんであるが、教材の質にも留意する必要がある。次章では、教養英語共通カリキュラムへの多聴の導入可能性に対して、教材について考察する。

#### 4. 多聴教材の可能性

以上、第3章で明らかになったように英語習熟度を高めるためには多読に加えて多聴が有効であり、第2章でいくつかの先行研究を吟味することにより、群馬大学教養英語共通カリキュラムへの多聴導入の条件が明らかになった。第一に、学生による教材へのアクセスが容易なことが必要である。同カリキュラムにおいては、多聴は授業外学習に位置付けられている。したがって、学内施設(例えばCALL教室や図書館内のAVブース)に限って、リスニング教材を使用可とするようなシステムは適さない。学生が好きな場所で、好きな時にリスニングを始め、終わることが必要である。具体的には、スマートフォンやPCなどによって、教材に簡単にアクセスできることが求められる。次に、教材が受講生の数と英語力に応じていることが必要である。多数かつ多様なリスニング用媒体を、700人以上の学生に提供しなければならない。最後に、教員が多聴の指導や進捗状況のチェックをできるだけ容易に行えるよう、配慮することが求められる。

具体的な教材については、Haginoya (2013) ならびに Povey (2016) が種類ごとにタイプ分けして詳しく紹介しており、以下、これらの研究をもとに、それぞれについて、アクセスの容易さ、多量かつ簡単な内容であるか、教員によるチェックの可能性、の3条件を検証していく。(なお、参考までに教材の一例を各タイプの末尾に列挙しておく。)

#### 4.1. CD付あるいは音声ファイル付の Graded Readers

Graded Readers は多読教材として用いられているが、その中には CD やダウンロード可能な音声ファイルが付属しているものがある。これらの CD やファイルなどの音声のみを (文章テキストと切り離して) 学生に提供し、多聴教材として用いることが可能である。

ただし、付属 CD を使用する場合、学生のアクセシビリティを高めるため、多くの枚数を図書館に揃え、館外に貸し出すことが必要である。付属音声ファイルを使用する場合は、ファイルをオンライン上にアップロードし、図書館の HP を通して接続できるようにすることが必要である。オンライン上に音声ファイルをアップロードする場合、一つのファイルに同時にログインできるのは1名のみと考えられるため、学生の混乱を避けるために、同じ音声ファイルを複数購入し、オンライン上にアップロードしなければならない。

多読教材に用いられていることからわかるように、Graded Readers は学習者の習熟度に合わせて簡単な内容なものから難しい内容のものまであり、また各レベルに応じて様々なジャンルの大量の本を有する。したがって、その音声ファイルを多聴に活用することは有益である。

また、多読同様、The Moodle Graded Reader Quiz module を用いることで、教員による多聴のチェック体制を比較的容易につくることができる。CD・音声ファイルを聴いた学生が Moodle 上で質問に答えることにより、聴取テキストの語数が Moodle 上に記録され、教員は Moodle 上でそれを確認し、学生の多聴活動の管理を行う。

とはいえ、Graded Readers 付属の音声を用いて多聴を導入する場合、関係機関 (財務部・総合メディアセンター) と事前に相談して、教材の購入やオンライン上へのアップロードの方法などについて調整を図らねばならず、多聴導入までに時間を要する。また、多聴導入のための費用も大きくなる。以下、教材の一例のウェブページ以外は、Haginoya (2013) で紹介されているものである。

##### 【教材の一例】

- Oxford Dominos with CD-Rom/DVD-Roms (Oxford University Press, 75 titles)
- Dolphin Readers with CDs (Oxford University Press, 40 titles)
- Oxford Classic Tales with CDs (Oxford University Press, 30 titles)
- Oxford Read and Discover with CDs (Oxford University Press, 50 titles)
- Penguin Readers with CDs (Pearson Longman, 310 titles)
- Penguin Active Reading with CD-Roms (Pearson Longman, 85 titles)
- Cambridge English Readers with CDs (Cambridge University Press, 84 titles)
- Cambridge Young Readers : Factbooks with CDs (Cambridge University Press, 22 titles)
- Macmillan Readers with CD-Roms (Macmillan Languagehouse, 115 titles)
- Scholastic ELT Readers with CDs (Scholastic, 19 titles)
- Scholastic Readers with CDs (Scholastic, 131 titles)
- IBC audiobooks with CDs (IBC Publishing, 39 titles)
- <http://toeic-town.net/ort-audio-free-download/>

- <http://tadoku.org/716lab/download/index.html#wh>
- [http://www.pearson.co.jp/products\\_services/extensive-reading/](http://www.pearson.co.jp/products_services/extensive-reading/)
- [http://lessonlibrary.jp/teacher\\_talk/macmillan\\_readers\\_catch\\_the\\_world.html](http://lessonlibrary.jp/teacher_talk/macmillan_readers_catch_the_world.html)
- [http://www.cosmopier.net/shop/index.php?main\\_page=index&cPath=121](http://www.cosmopier.net/shop/index.php?main_page=index&cPath=121)
- <https://elt.oup.com/?selLanguage=ja&cc=jp>
- [https://elt.oup.com/cat/subjects/graded\\_reading/?cc=jp&selLanguage=ja#](https://elt.oup.com/cat/subjects/graded_reading/?cc=jp&selLanguage=ja#)

#### 4.2. Web 教材

費用や時間をかけずに、多聴を今すぐカリキュラムに導入するには、Web 教材の使用が適している。ESL (English as a Second Language) 学習者に配慮した様々なタイプの無料教材が存在しており、学生はスマートフォンやパソコンからアクセスすることができる。ただし、学生の多聴自習を教員がどのようにコントロールするかについては、何らかの工夫が必要だ。

##### 時事ニュース (ESL 学習者向き)

Web 上の時事ニュースについては、範囲を決めて、リスニングテストを行うことで、教員が学生のリスニング学習をコントロールすることが可能である。たとえば、1 週間という範囲をあらかじめ設定したうえで、週に 1 度、当該 7 日分の Web 時事ニュースから抜粋して、リスニングテストを行うことが考えられる。ただし、教員は 1 週間に 1 度テストを実施し、添削し、点数を記録しなければならず、教員側の労力がある程度必要とする。

あるいは、同様に範囲を決めた上で、毎週、学生同士の間でニュースの内容を要約させ、かつ、それについて短い討論をさせることも可能かもしれない。ただ、多聴においては授業外に多量に聞かせることが必要だが、アウトプット活動については授業内で題材を制限して行うなど、何らかの工夫が必要であろう。

時事ニュースの音源には、スクリプトが記載されていることが多い。だが、Hoogenboom & Keith (2015: 99) によれば、スクリプト記載の教材をリスニングの自習用に課した場合、学生が教材を「聴いて」ではなく、スクリプトを「読んで」理解したのではないかとの疑いが生じる。

##### 【教材の一例】

- <http://spotlightenglish.com/>
- <http://learningenglish.voanews.com/>
- <http://learningenglish.voanews.com/a/3726305.html>
- <http://edition.cnn.com/cnn10>
- <http://www.bbc.co.uk/learningenglish>

#### オーディオブック

これらの教材を使う際、教員による学生の自習のチェック体制を確立する必要がある。例えば、いくつかの選択肢の中から、学生に教材を選ばせ、それについて、主題・あらすじなど 1 行程度の日本語でレポートさせ、その情報をもとに、その教材についてのクイズを Moodle 上に作っていくことなどが考えられる。学生からの情報が増え、クイズが集まれば、多聴の後に Moodle クイズを解くだけで多聴時間が換算されていくシステムを構築することが可能かもしれない。

## 【教材の一例】

- <http://www.openculture.com/freeaudiobooks>
- <https://librivox.org/>
- <http://www.gutenberg.org>
- <http://etc.usf.edu/lit2go/>
- <http://freeclassicaudiobooks.com/>
- <http://www.loyalbooks.com>
- <http://www.storynory.com>
- <https://www.digitalbook.io/>

## 録音されたプレゼンテーション

学生に紹介はできるが、自習で聴かせるには難しいかもしれない。比較的英語力が上のクラスにおいて、授業内の教材として使うことはできると考えられる。

## 【教材の一例】

- TED Talks (<https://www.ted.com>)
- <https://tedxesl.com/>
- <https://freeenglishlessonplans.com/category/video-classes/ted-talk-lesson-plans/>
- <http://www.linguahouse.com/esl-lesson-plans/esl-course-plans/general-english-course-plans/ted-english/>
- <http://kalinago.blogspot.kr/2011/09/10-speaking-english-activities-using.html>

## 教育用のウェブサイト (ESL/EFL 学習者向け)

学生に紹介はできるが、組織的な多聴導入には、適さないかもしれない。以下、教材の一例の最後については、Ducker (2013: 519) の報告で使用されたサイトである。Ducker によれば、この無料サイトは2,000以上の自然な会話教材を集め、教材は難易度により分類され、録音時間も様々である。特別なサインアップは必要ない。音声ファイルはHPからすぐにアクセスできる。会話はスクリプト無し・リハーサル無しで話しており、学生は自然な会話を聴くことができる。世界中の様々なアクセントの会話文がそろっている。また、会話文のスクリプトがテキストに付属しており、学生が内容・文法・語彙などをチェックすることができる。

## 【教材の一例】

- <http://www.esl-lab.com/>
- <http://www.real-english.com>
- <http://englishmedialab.com/>
- <http://www.eslfast.com/>
- <http://www.eslvideo.com>
- <http://www.talkenglish.com/>
- <http://www.elllo.org>

## 5. 結論

本稿では、群馬大学教養英語共通カリキュラムのこれまでとこれからを論じた。第1章ではこれまでの成果を振り返り、特に共通カリキュラムの下、体系的に外国語学習（英語に限らないが）をデザインすることが学習者の習熟度を上げるのに効果があること、「読む」技能向上のために多読が有効であり、授業外学習という生涯にわたって学ぶ自律的学習者の育成には欠かせない学習にも多読が有用であることを確認した。第2章では多読の成果を踏まえ、共通カリキュラムのこれからに向けて、英語運用能力を総合的に高めるために多聴の必要性を論じた。共通カリキュラムへの多聴の導入可能性について、第3章では多読と多聴に関する意識調査の結果を踏まえて、第4章では多聴、特に授業外学習としての多聴に適した教材の検証を踏まえて論じた。結論として、意識調査の結果から明らかになったように、英語学習者にとって多読に加えて多聴も有効な学習法であり、教材の検証から分かったように、多読同様、多聴を授業外学習として成功させるには習熟度、学習スタイルなどにばらつきのある多様な学習者に対応した様々なレベル、ジャンルの教材を準備する必要がある。今後、教養英語共通カリキュラムにおいて多聴を導入し実施するに当たっては、第4章で検証した各種教材について、その妥当性・有効性・有用性を、実践をとおして検証していくことが期待される。

### 謝辞

本稿第3章の多読・多聴に関する意識調査に、夏季休業中にもかかわらず、無償で協力してくれた群馬大学教育学部英語専攻生に、貴重なデータを提供してくれたことに対して、この場を借りて感謝申し上げます。

### 参考文献

- 飯田敦史編『群馬大学理工学部教養英語教育実践報告書平成23～25年度』群馬大学教育基盤センター外国語教育部、2016年。  
 酒井邦秀『快速100万語！ペーパーバックへの道』ちくま学芸文庫、2002年。  
 新川智清「多様・多聴を導入した沖縄高専の英語教育—1期生から7期生まで—」『沖縄工業高等専門学校紀要』第6号、2012年、pp.27-37。  
 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（答申）」平成24年8月28日。  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf)  
 西澤一、吉岡貴芳、伊藤和晃、深田桃代、長岡美晴「豊田高専における英語多読授業の成果と課題」第7回多読教育ワークショップ2008年8月16日。  
 長谷川修治、中條清美「学習指導要領の改訂に伴う学校英語教科書語彙の時代的变化—1980年代から現代まで—」*Language Education & Technology* v.41, 2004。  
 長谷川修治、中條清美、西垣知佳子「中・高英語検定教科書語彙の実用性の検証」『日本大学生産工学部研究報告B』第41巻、2008年、pp.49-56。  
 文部科学省国立教育政策研究所「大学生の学習実態に関する調査研究について（概要）」2016年。  
 Day (Richard R.) & Bamford (Julian), *Extensive Reading in the Second Language Classroom*, Cambridge University Press, 1998。  
 Ducker (Nathan D.), Self-directed Internet-based extensive listening portfolios, *JALT2012 Conference Proceedings*, 2013, pp.516-526。  
 Ducker (Nathan D.) & Saunders (J. Matt), Extensive listening: Using authentic materials, *JALT2013 Conference Proceedings*, 2014, pp.383-394。  
 Haginoya (Etsuko), Extensive listening and its benefits on EFL students, 『尚美学園大学総合政策論集』第16号、2013年、pp.11-20。  
 Holden III (Wm. R.), Extensive listening: A new approach to an old problem, 『富山大学人文学部紀要』n.49, 2008, pp.299-312。  
 Hoogenboom (Raymond) & Keith (Barry), Increasing spoken output through extensive listening and audio journals, 『群馬大学教育

実践研究』 n.32, 2015, pp.91-102.

Lyddon (Paul A.), Training Japanese university English learners for greater autonomy, *JALT2010 Conference Proceedings*, 2011, pp.700-713.

Lyddon (Paul A.), Japanese university student self-motivation and language learning autonomy, *JALT2011 Conference Proceedings*, 2012, pp.455-471.

NSSE (National Survey of Student Engagement), Annual Results 2011, Fostering Student Engagement Campuswide, p.15, Figure 7  
参照：[http://nsse.indiana.edu/NSSE\\_2011\\_Results/pdf/NSSE\\_2011\\_AnnualResults.pdf](http://nsse.indiana.edu/NSSE_2011_Results/pdf/NSSE_2011_AnnualResults.pdf)

Povey (Edward), Extensive listening: Pedagogy, resources, and tools, *International Journal of Educational Investigations*, Vol.3, No.7, 2016, pp.35-49.

Renandya (Willy A.) and Farrell (Thomas S.C.), 'Teacher, the tape is too fast!': Extensive listening in ELT, *ELT Journal*, 2010.

Vandergrift (Larry) & Goh (Christine C.M.), *Teaching and Learning Second Language Listening - Metacognition in Action*, Routledge, 2012.

## 注

- 1 群馬大学における多読実践については、ベアリー・キース「多読プログラム概要」(飯田, 2016: 21-24)を参照。
- 2 長谷川、他(2008: 52)の研究によると、2006年時点の中学校英語教科書(*New Horizon 1, 2, 3*)の延べ語数は6,248語、同時点での高等学校英語教科書(*The Crown English Series I, II, IIB*)の延べ語数は34,751語であった。
- 3 『平成28年度群馬大学理工学部共通英語教育科目学生ハンドブック』p.12.
- 4 『平成29年度群馬大学共通英語教育科目学生ハンドブック(理工学部・教育学部)』p.12, p.23.
- 5 『平成29年度群馬大学共通英語教育科目学生ハンドブック(理工学部・教育学部)』pp.31-32.
- 6 平成30年度には、教育学部2年生も多読に参加するため、共通カリキュラムの多読参加者は950名にのぼる。同カリキュラム以外にも、教員が任意で多読を採用するクラスもあるので、平成30年度には1,000名を超える学生が多読に参加することになる。
- 7 『平成29年度群馬大学共通英語教育科目学生ハンドブック(理工学部・教育学部)』p.12, p.24.
- 8 なお、平成24年に実施された理工学部生対象の授業アンケートによれば、学生が多読に費やした自習時間は毎日平均30分であった(草薙優加「平成24年度授業評価アンケート報告」(飯田, 2016: 72))。
- 9 TOEICとCEFRとの換算表については、文部科学省平成27年6月5日付「生徒の英語力向上推進プラン」p.9を参照：  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/\\_icsFiles/afieldfile/2015/07/21/1358906\\_01\\_1.pdf#search=%27CEFR+%E6%96%87%E7%A7%91%E7%9C%81%27](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2015/07/21/1358906_01_1.pdf#search=%27CEFR+%E6%96%87%E7%A7%91%E7%9C%81%27) (2017年2月17日参照)
- 10 <https://support.cambridgeenglish.org/hc/en-gb/articles/202838506-Guided-learning-hours> (2017年2月17日参照)
- 11 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申)」中央教育審議会、平成24年8月28日、p.11.
- 12 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申)」中央教育審議会、平成24年8月28日、p.12. アメリカの大学生についての調査については、NSSE(National Survey of Student Engagement), Annual Results 2011, Fostering Student Engagement Campuswide, p.15, Figure 7参照：[http://nsse.indiana.edu/NSSE\\_2011\\_Results/pdf/NSSE\\_2011\\_AnnualResults.pdf](http://nsse.indiana.edu/NSSE_2011_Results/pdf/NSSE_2011_AnnualResults.pdf)
- 13 「大学生の学習実態に関する調査研究について(概要)」文部科学省国立教育政策研究所、2016年、p.3, p.12.
- 14 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申)」中央教育審議会、平成24年8月28日、p.13.
- 15 飯田敦史「平成25年度理工学部教養英語学力伸長報告」(飯田2016: 57).
- 16 Rob Waring, Starting Extensive Listening, [http://www.robwaring.org/el/starting\\_extensive\\_listening.htm](http://www.robwaring.org/el/starting_extensive_listening.htm) (2017年3月8日参照)
- 17 飯田敦史「平成25年度理工学部教養英語学力伸長報告」(飯田, 2016: 57).
- 18 ただ、1年生のみが、教養英語クラスで多読の組織的な成績算入を経験しており、多読の効果や方法について、教員から説明を受けているかプリントを配布されている。したがって、1年生対2~4年生の比較は興味深いところではあるが、今後の課題としたい。